鹿児島県立鶴丸高等学校広報紙

好学愛知
自律敬愛
質実剛健

鶴信

第92号　H26．5．31

鹿児島県立鶴丸高等学校
〒890-8502　鹿児島市薬師二丁目1番1号
TEL 099-251-7387 FAX 099-255-3433
http://www.edu.pref.kagoshima.jp/sh/Tsurumaru/index.html

6月の行事予定

6　月			
1	㊐		
2	月	全校朝会　集団読書(1年) 中間考査時間割発表	
3	火		
4	水	PTA総務部・学年代表者会	
5	木		
6	金		
7	㊏		
8	㊐	第1回英検一次試験	
9	月	**中間考査(1日目)** 3年学力検討会	
10	火	**中間考査(2日目)** 中高連絡会　学校安全の日	
11	水	**中間考査(3日目)** 部活動生集会	
12	木	クラスマッチ(午後)	
13	金	クラスマッチ(終日)	
14	㊏		
15	㊐		
16	月	学年朝会	定期教育相談(平常授業)
17	火		
18	水	3年進路講演会	
19	木		宅習時間調査
20	金		
21	㊏	悠学講座① 3年小論文模試	
22	㊐	県職員採用試験会場	
23	月	全校朝会 実力考査時間割発表	
24	火		
25	水		
26	木		
27	金		
28	㊏		
29	㊐		
30	月	学年朝会	

次の高みを目指す

教頭　竹井　俊久

アメリカの心理学者ウィリアム・ジェームズは「人生はその人の考えた所産である」と述べた。強く思ったことが結果となって表れる。良い思いを描き一所懸命努力する人には良い人生が開け、悪い思いを描く人にはそれなりの人生が待っている。つまりは、人生は心に描いたとおりになるということである。

映画の黎明期に数々の作品を作り、今も多くの人たちに愛されている、世界の「喜劇王」チャールズ・チャップリンには次のようなエピソードがある。

1889年、彼はイギリスのロンドンに生まれ、貧しい幼少時代を過ごした。兄の勧めで入ったパントマイム劇団で、アメリカ巡業中にその才能を高く評価され、映画界に入り、やがて「街の灯」「モダンタイムズ」「独裁者」「ライムライト」など、次々に大ヒット作を作り出した。アメリカ映画界で大成功を収め、地位と名誉を獲得したが、その反動による誤解により米国から国外追放となる。栄光と挫折。波乱の時代と厳しい人生の荒波の渦中に投げ込まれながらも、チャップリンは立ち止まらず、次々と名作を作り続けた。

そんなチャップリンに、ある時、新聞記者が質問をした。「あなたの最高傑作の作品は何ですか」と。すると彼はこう答えた。「Next One（次の作品だ）」と。全く予想していなかった答えに、みんなは呆気に取られ、「過去の作品から最高傑作を探そう」としていた自分たちの考えの浅はかさを大いに反省した。アカデミー賞を受賞し、映画界の頂点まで登り詰めたチャップリンが、現在の栄光に満足せず、さらに次の高みや新しい目標を目指して生きていこうとする。ここまでやったらもう満足だと思えば、人間の成長はそこで止まってしまう。チャップリンは現状に満足するのではなく、まだまだこれからだという気概、そして常に向上心を持ち、あきらめない生き方を貫いたのだ。

どの分野でも、誰も追いつけない成果を残す人は、準備の時点から考え方や意気込みが違う。「自分はまだまだやれる」という意気込みをもってこそ、良い方向へ向かう力が湧いてくる。能力は「ある」と思う人にだけあり、「ない」と思えば、あっても発揮できない。現状に満足せず、より高みを目指す。人生を登山に例えるとすれば、目指す山はきっと高く険しい山であるに違いない。そこには幾多の難所があり幾度となく試練が訪れるであろう。しかし、苦難を乗り越え、その頂に達したとき、想像を超える景色が目の前に広がるはずである。その景色を見た時、その空気を感じた時に、前とは違う自分を感じることができるであろう。人はその景色を自分の目で確かめ、体感するために頂を目指すのかもしれない。

終わりが見えない遠き行程ではあるが、強く心に思い描いて自分の人生を切り拓いてほしい。本校校歌に「究めなむ道遠くとも　たゆみなく日々に新たに」とあるように、勉強、部活など何事に対してもまだ見ぬ高みを目指してほしい。

「生徒みんなで創っていく！」
―生徒総会―

5月7日（木）前期生徒総会が開かれた。前年度の活動報告、決算報告、本年度の予算案承認の後、第三号議案として「鶴丸生のマナーとは」というテーマで全校生徒による協議が行われた。

清掃中の態度や休日の自習教室の利用状況などについて、具体的な提案や要望が出るなかで、「他人のことを考え、今、自分は何をなすべきなのかを意識するべきだ」といった提言も挙げられた。また「『マナー』について協議すること自体が『問題提起』。話し合わなくても実現できるのが鶴丸生だ。上級生が模範を示し、下級生に鶴丸生としての伝統を受け継ぐべく、各学年の生徒たちが自覚をもつべきだ」という意見も出た。発言は学年を問わず続き、活発な協議となった。

「名著」から学ぶ、皆で学ぶ
―集団読書―

5月19日（月）、三学年の集団読書が行われた。学年全員で共通の一冊の本を読みながら、他者や社会との関わりの中で、いかに生きるかということについて考える機会とするのが目的である。使用図書は『こころ』（夏目漱石文学』（石原千秋著、朝日文庫）。夏目漱石の『こころ』に対する生徒それぞれの意見と専門家の論とを比べ、新たな文学観を獲得するとともに、「生きる」ということについて、各学級で活発な討議がくり広げられた。

今回の集団読書では、どの学年も「名著」と呼ばれる作品を対象として計画されている。集団読書の意義は「個」の読みが「全体」の読みに深まっていくおもしろさがあるが、ぜひ、個々でも日々の中に読書による深い思索の時をもつことで、自己を見つめたり、未知の世界に思いを馳せたりしながら、有意義な高校時代を過ごしてほしい。

以下は生徒の感想文からの抜粋。

＊＊＊

文豪夏目漱石もまた、明治に生きた、ひとりの人間だったのだ…。こんな当たり前のことが、本を閉じた私の感想であった。

漱石は「日本を代表する作家」として、教科書にも名前が載っている。しかも顔写真付きである。だから、私にとって漱石は、とにかくすごい作家だと、知ってはいるがどうもとつきにくい、というさびしい位置に置かれてしまっていた。

『こころ』で「先生」は、こちらが不可解に思うほど、いろいろなことで悩んでいる。自分の中にあるものとことん向き合い、何か事を起こすたびに反省し、後悔している。筆者によると、当時の人々は、悩むことを身分の高いエリートの暇つぶしのようにみなしていたのだという。漱石の小説の主人公たちはみな、家族との関係や人間関係、大きなことから小さなことまで、悩み苦しみ抜いている。小説は書き手の考え方や性格、体験が反映されることが多いという。漱石も、ひとりの生きた人間として、悩んだりすることもあったということなのだろう。そう考えたら、彼が身近に感じられ、元気づけられたような気がした。

大人になれなかった「先生」は、青年に自分を越えさせることで自立させようとした。わたしはいつ、自分で誰かを越えることができるのだろうか。

（34R　黒木智絵）

前期集団読書のテキスト

一学年　芥川龍之介「地獄変」（集英社文庫）
二学年　遠藤周作「沈黙」（新潮文庫）
三学年　石原千秋「『こころ』で読み直す漱石」（朝日文庫）

自分の運転　振り返ろう
―交通安全教室―

5月27日（火）、交通安全教室が行われ、教材映画の視聴の後に、歩行者、自転車乗用者の安全な通行について講話があった。講師の鹿児島西警察署交通課下田公裕さんの「自転車乗用者は、被害者にも加害者にもなり得る。車にだけでなく、歩行者にも十分注意し、思いやりをもった安全な走行を」という言葉に、生徒たちは熱心に耳を傾けていた。

ストレスと上手につきあって
―ストレスマネージメント―

五月中旬からのLHR等の時間を利用して、一学年ではストレスマネジメント講座を2クラスずつ実施した。適切な緊張への自己調整ができるようになることをめざしたもの。日本ストレスマネジメント学会理事の佐伯陵子さんを講師として迎え、生徒たちはフロアに横たわり、動作や呼吸のコントロールのための方法や体の力の抜き方などを学んだ。

「日常で実践できるストレスマネジメントの具体的な方法を学ぶことができた」「日頃から実践してみてストレスをためないようにしたい」「オリンピックのメダリストの方々も緊張するのだと知って驚いた。ストレスを上手にコントロールして、最高のコンディションを作れるようになりたい」などの声が聞かれた。

PTA総会　開催される

5月13日（水）PTA総会が開かれ、前年度活動報告及び決算報告、今年度事業計画及び事業予算案、新役員の選出などについて協議が行われ、議案については全て承認された。

本年度の役員は次のとおり。

［（新）は本年度新たに選出された役員］

会　長　丸山健太郎（23R）
副会長　石丸　惠子（25R）（新）
副会長　和田　茂（31R）
監　事　徳利　浩司（33R）
監　事　城光寺　剛（25R）

また、副会長を退任された岩元優子様に感謝状と記念品が贈呈された。